

## 所員自著紹介

1. 書名：『往きて、還る。一やぶにらみの日本古典文学』
2. 著者：深澤 徹（「澤」を「沢」とするのはペンネーム）
3. 出版社：現代思潮新社
4. 出版年月：2011年9月30日
5. ページ数：245頁

神大の立地するヨコハマの「ヨコ」をキーコンセプトに、古典の復権に向けたいくつかの論考を収録している。古典と近現代の作品（たとえば福沢諭吉や丸山眞男、水村美苗のテキスト）とを、同じ平面に「横並び」に置くことで、その間を行ったり来たりする。そうすることで見えてくる、新たな古典への視覚を探ろうとした。タイトルを「往きて、還る。」とした所以である。本書の中身は、大きく三つに分かれる。第一部は総論にあたるが、その表題「日本古典文学における「実学」の転回」は、丸山眞男の論考「福沢諭吉における「実学」の転回」（1947）のもじりである。第二部と第三部は各論で、そのタイトル「歴史物語を遠く離れて」と「日記文学を遠く離れて」は、いうまでもなくジャン＝リュック・ゴダールの『ベトナムを遠く離れて』（1967）のもどきである。絶えず「ヨコ」へとズレ込むことで、本書にはさまざまな〈遊び〉を持ち込んだつもりだが、そもそも「文学」とは〈遊び〉なのである。文学＝遊び。本書は深澤の前著『愚管抄の〈ウソ〉と〈マコト〉』（2006）の続編、というかそのダイジェスト版の位置づけにある。したがって、あつかうおもな対象は、天台座主慈円の歴史評論書『愚管抄』だが、その周縁領域としての「歴史物語」や「日記文学」にも言及している。日本古典文学の研究には、どういうわけか〈遊び〉がない。そこに〈遊び〉を持ち込むこと。本書の表紙のデザインも、おおいに遊んだつもりだが……気づかれないうらな。

（文責：深澤 徹）

Kiichi Fujiwara and Yoshiko Nagano eds. The Philippines and Japan in America's Shadow, Singapore: National University of Singapore Press, 2011, 340pp.

藤原帰一・永野善子編『アメリカの影のもとで：日本とフィリピン』法政大学出版局  
2011年6月、viii+304頁。

本書は、平成17-18年日本学術振興会科学研究費補助金「アメリカの影の下で：日比両国における対米認識と社会形成の比較研究」（研究代表者：藤原帰一）の研究成果を英語と日本語で公刊したものである。英語版には序論と12本の論文が収録され、日本語版には序論と8本の論文が含まれている。20世紀初頭、アメリカはフィリピンを事実上植民地化した。さらにアジア太平洋戦争によって、日本が大東亜共栄圏の名のもとでフィリピンを侵略した。日本は、その後の敗戦に伴い、6年間、アメリカの占領下に置かれることになる。本書は、このアメリカによる支配という経験がそれぞれの政治・社会・文化・歴史に与えた影響を、日本、フィリピン、アメリカの研究者がともに比較考察した試みである。

（永野善子）

1. 書名：『音声学基本事典』
2. 著者：城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男 編著
3. 出版社：勉誠出版
4. 出版年月：2011年8月
5. ページ数：xi, 540p

本書は、音声学・音韻論の基本となる約100項目を平易かつ詳細に解説した、一般向けの事典で、28名の執筆者によって書かれている。音声学の事典は少なく、日本では、『音声学大辞典』（日本音声学会編、三修社、1976年）に次いで2

冊目である。音声によるコミュニケーションが重要視され、また、IT化により音声データとして扱われることも増えている今日、音声についての正しい知識はますます必要となっている。本書は、音声学、調音音声学、音響音声学、聴覚音声学、音韻論、アクセント・イントネーション、プロソディー、単音・分節音、日本語の音声についての章に分かれ、それぞれの分野で基本的な項目を解説している。

筆者は、「音響音声学」(pp. 115-122)と「基本周波数・フォルマント周波数」(pp. 126-131)の項目の執筆を担当した。「音響音声学」では、デジタル信号について、波形とスペクトルとの関係を中心に解説した。最近では、普通のPCとフリーのソフトウェアで手軽に音声分析ができるが、やはりその結果の解釈には基礎知識が必要である。「基本周波数・フォルマント周波数」では、初学者に混同されやすい両者の概念を説明した。

言語は、音声として実世界に現れる。音声は、身近であり過ぎて、一般の人には馴染みの薄い研究分野である。人間が使っている音声とはどのようなものなのか、一度本書を手にとられてみてはいかがだろうか。

(小松雅彦)

1. 書名：『近代中国都市案内集成—上海編』
2. 著者（監修、解説）：孫 安石
3. 出版社：ゆまに書房
4. 出版年月：2011年5月25日
5. ページ数：全7巻

このたび戦前上海を訪れる多くの日本人が手にした旅行案内を代表する『上海案内』を含めた一連の上海ガイド・ブックがゆまに書房から『近代中国都市案内集成—上海編』として復刻されることとなった。

中国近代史のなかで上海ほど特異な発展を成し遂げた街があるだろうか。上海は様々な顔をもつ。租界に代表される「植民都市」であり、中国共産党が成立した「革命都市」であり、中国人・

欧米人・日本人・ロシア人などが同居する「国際都市」でもあった。

この二〇世紀の前半の上海を、欧米人は「冒険家の楽園」、または「東洋のパリ」というあだ名で呼び、日本人は混沌と猥褻が共存する上海を憧れと軽蔑が入れ混じった複雑な感情を込めて「魔都」と呼んだ。

この「魔都」上海という日本人の上海イメージの形成に谷崎潤一郎、芥川龍之介、村松梢風、金子光晴に至る大正時代の作家の系譜が一定の役割を果たしたことは、周知の通りであるが、この日本人の上海イメージの形成にもう一つの大きな影響を与えたのが、今回に復刻される上海ガイド・ブックであるように思われる。

大正十二（一九二三）年に長崎と上海を結ぶ定期航路が開かれるや上海は日本人にとって最も身近な「西洋」になった。一時期、長崎では「下駄」を履いて上海へ、と言われる位、上海が身近な存在になったことは広く知られる通りである。

しかし、言葉が通じない異国の地「上海」での生活は容易ならざるものであった。初めて海に到着する日本人であれば、まずは、人力車と荷車を雇い、大きな荷物を担ぎ、上海の旅館に投宿しながら下宿先を探さなければならなかった。いよいよ住居が決まれば、次は毎日の日常生活が待っている。「文路が銀座なら呉淞路は日本橋か、其の文路と呉淞路の交叉するところにマーケットがある。肉類、魚類、禽類、野菜さては氷まで、ありとあらゆる日用食品」（『上海案内』第一版、四二頁）を購入し、日々の生活に備えていかなければならない。その後、何とか上海の生活に慣れ、商売も順調な売れ行きが期待できそうな人であれば、花柳界の遊びの作法を覚えていきたい。

そこで求められたのが、上海での生活の作法を案内してくれる旅行ガイド・ブックであり、その代表的なものが『上海案内』（金風社、一九一三年、第一版～一九二七年、第十一版）であった。この『上海案内』は上海の歴史と名所案内は勿論、上海から中国の内地に向かう鉄道の時刻表と料金や上海に滞在する日本人居留民の職種と住所、電話番号をも網羅し、掲載している。また、『上海案内』には当時、上海で商業活動に従事し

ていた日本人の商業広告が大量に掲載されていたことも注目したい。

上海ガイド・ブックは、これから上海に在留する日本人にとっては各種の生活情報を手にいれる指南書であり、上海に在留した日本人にとっては自らが経験した「喜怒哀楽」を映す出す合わせ鏡でもあったと言い換えることができよう。

ところが、明治、大正、昭和期を通して数多く刊行された上海ガイド・ブックであるが、これを時期別に分けると、大きく三つの時期に分けられるように思われる。

まず、最初に、一九一〇年代に上海で金風社（出版社）を運営していた島津長次郎によって刊行された『上海案内』が中心になったガイド・ブック時代。そして、一九二〇年代に入り、上海と日本の経済関係が密接になる時期に上海日本商工会議所が編集に加わった『上海概覧』（一九二〇年版、一九二三年版）、『上海要覧』（一九三九年）など経済情報を主に盛り込んだガイド・ブックが発行された時期。そして、一九三〇年代に入り、満州事変、上海事変などで日中関係が悪化する中、日本国際観光局（現在のJTBの前身）が上海の戦跡めぐりを紹介するガイド・ブックの製作にかかわる時期である。

今回、ゆまに書房が復刻する『近代中国都市案内集成—上海編』は、上記の三つの時期に刊行された代表的な上海ガイド・ブックを集めており、我々は、本シリーズを通して戦前の日本人の上海イメージがどのように形成され、また変容していったのか、その一端を覗いてみることができよう。本シリーズが日本近代史、中国近代史、日中関係史はもちろん、文学、経済など幅広い分野の研究者によって活用されることを願ってやまない。

（孫 安石）

## 『租界研究新動態』

大里浩秋・孫安石編

上海人民出版社 2011年3月

10年余前に中国・杭州にかつて置かれていた日本租界について個人的に調べ始め、次いで数人の同僚と語らって人文学研究所の日中関係史グループでも租界をテーマにした勉強会を始め、同メンバーで学内共同研究助成を得て租界があった現地の現状調査を行い資料を集め、さらには21世紀COE非文字資料研究でも調査研究を継続し、その後非文字資料研究センターでも引き継いでいるうちに、神奈川大学人文学研究叢書に連なる2冊の成果を公刊することができた。

『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』と『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』がそれであるが、その2冊から7篇の論文を選び、さらに上海の研究者馬長林氏が当地の雑誌に発表した論文を加えて1冊にしたのがこの本である。

長年中国側研究者の協力を得つつ積み上げてきた研究成果を広く中国国内でも読んでもらい、彼らと意見交換をしてさらに研究を深めたいと考えて、非文字資料研究センターの資金援助を得、上海の有数の出版社に依頼して中国語で出版したものであり、これを読んだ人からの好意的な感想が多く寄せられている。

現在は非文字資料研究センターで「東アジアの租界とメディア空間」と題する研究班を作って研究を継続し、中国のみか朝鮮に置かれた租界、さらには横浜を含む日本国内の居留地に関するテーマに関心を広げて、多くの方に協力していただきおもしろい共同研究に発展できればと考えているところである。

（大里浩秋）